

住民運動と介護、中村亮嗣の奮闘記

黒岡 實

昭和四十二年（一九六七）、むつ市に原子力実験船の母港設置問題が急に持ち上がり、その頃から中村は原子力の資料を集め、スクラップして皆んなにも見易く整理して、この問題に深くかわかることになる。

むつ市は本州の最北端下北半島中部にある。最果ての地であり、そのむつ市に中村亮嗣りょうじ（平成二十八年六月、八十二歳で逝去）のような筋を曲げない首尾一貫した姿勢を保った人間がいた。なんと半世紀の間、国家権力と闘った男なのだ。

その頃ちょうど「原子力船母港に反対しよう」という、手書きポスターを見て、二十歳を過ぎたばかりの松井氏（牧師の息子）に電話し出会った。松井氏は「ベトナムに平和を！」のステッカーを自転車へ付けて、社会運動に若い血をたぎらせていた。途中彼は東京の大学へ進学するために、むつ市と東京を往き来したが、この間もいろいろな団体と接触する機会を作ってくれた。

ところが、中村が住民運動を始める前に興味を持ったのが美術だった。それは県立田名部高校の美術科のA先生との出会いが切っ掛けだった、昭和二十四年の頃である。

しかしその先生が三年生の二期に教師を辞めて帰京することになり、全生徒の前で、「芸術と哲学」について話したが、内容は日本では大陸渡来の仏教・儒教と、日本古来の神道などの宗教思想が混在した東洋哲学が輸入され、日本哲学と融和させた。これからは画家は科学にも関心を持つ必要がある、ということであった。

また、中村は原子力発電に関して激しいやり取り（質問状の解答）を、折衝の経緯があるので、向こうもそれなりに形式的には敬意を払ってくれた。以下は平成六年のものだ、すなわち、

「……日頃より中村様にはご意見はやや異なりますものの、当社事業に関心をお寄せいただきありがとうございます」と慇懃無礼な対応はあった。しかしこれは担当者に専門知識がないから、形式的な弁解めいた内容になる。前記の松井氏の紹介などで、教職下北の自然観察、全国の原子力施設見学グループとのつながりも出来た。

当時、地元労組とも連絡をもちながら、運動は続けながらも県漁連の杉山四郎会長や、むつ市漁協の大室男次組合長（いずれも故人）に出会う。

しかし、日本原子力開発事業団も行政側も、原子力船を中心とした情報を市民に対しては全く無視していたことで、中村は仕事と絵の合間をぬって発行するチラシの中味はあくまでも原子力の情報を中心としたものであった。

この間、当時の皇太子夫妻のテープカットにより造船所で進水、陸奥湾大湊港への入港、^{ぎょうそう}機装、燃料装荷などと進行していた一方で、湾内漁協の水揚げ、特にホタテ養殖が軌道に乗った時期でもあった。

中村亮嗣は自転車通勤（歯科技工士）途中、田名部川の対岸に繋留された「むつ」と命名された原子力実験船を毎日のように眺めていた。

そんな中村亮嗣先輩と最初にお会いしたのは、私が二十九歳の時だったが、ご本人は八十歳を過ぎても精力的に動き回っていた姿に、私はいつも敬服していた。

五十年前に住民運動と歯科技工士の二足の草鞋で独自の人生を歩みはじめた時に、周囲からは、

「……どうせ住民運動は国家権力に勝てるわけがない。はじめから勝負は決まっている」と言われながら、屈することなく信念を貫き、筋を曲げなかった。

当時は時々電話があり、こんな内容だった。テレビを見ていたら、介護職の男性が、「ヘルパーの仕事はそれなりにやりがいがある。長く続け、この仕事に骨を埋めたい」と熱く語っていたという。

中村も亡き母を介護した体験から、昨今の介護の直面する問題へ強い関心を寄せていた。母の介護といっても一人ではなく、ヘルパー、看護師、そして青森市に住む弟に手伝ってもらったの介護であった。中村自身も七十歳を越えてからの老々介護になりかねない状況であった。

最近の新聞の投書には、介護職の待遇についてのものが多いが、確かに給料は安い。この現実に憂いていた中村だった。

日々の生活は、朝九時にアトリエに出勤。昼前十一時半に自宅の台所で昼食を準備、なるべくうす味を心掛けていた。

芋と野菜を中心にごはんには押し麦を入れて炊く。これを食べると、少なめにしても腹の中で膨れて、ちょうど腹八分目になる。

母は、九十年代半ばの大往生だったが、息子さんによる最後まで誠心誠意の介護に、母の顔は安らかだったという……。

その母親の介護を振り返ってもらった。食事は朝八時～八時三十分、昼十二時～十二時三十分。夕方七時～十七時三十分の三回に合わせて、早朝五時に起床し、小さい鍋に汁寄せ鍋、その他のおかずを作って、そして身のお世話をする。なかなかのスケジュー

ールである。

そして自分の食事は、麦飯は大根おろし（母は長いもおろし）以外はほとんど同じメニュー。妹がたまに来て、いろいろ作ってくれたという。自由時間を作り、外の用事を済ませたり、アトリエで書類整理、そして少々、昼寝。住民運動関係の作業をしたり、文書作成をしたりしていると、もう夕方である。

七十歳を越しての母親の介護は、老々介護に近いものであったが、正にぶっつけ本番だった。動き易く安全のために家を改修したり、いろいろと苦労も多かったが、それらはヘルパーの回数を増やすことで対応できた。

とにかく、母親は腰から下が不自由で立てなかつたので、抱える時にはこちらが、ぎっくり腰にならないように注意した。ベッドから降ろし、トイレの便座に座ってもらった。

介護も結構、体力を使うものだ実感しながらも、若い頃から毎日自転車で体を鍛えてきたことが功を奏したようだ。考えてみると、現在の自身の健康と体力に役立っていると思っっているが、もしこれが男親だったら、もっと体力が必要だったのではと思っっている。

ヘルパーという職業は、体力さえ大丈夫ならば、あとは気持ちの問題だ、という考え方もある。しかし介護職を収入面から考えると、やはり職業人としてやっていける額ではない。この国の介護制度の貧しさがここにもある。

中村は長年勤務した歯科医院を定年退職し、嘱託として勤務しながら、東京から「ダウンした女性に仕事を少しづつ譲り、勤務を早目に切り上げるようにした。その後、歯科医院の二代目院長が入院し、そして死去。

その後は週一回の代診となる間は臨時衛生士として勤務を続けた。実は母の介護は、このように、住民運動にも熱を入れた二股の介護だった。

原子力船「むつ」の母港問題から始まった、むつ市周辺の住民運動も五十余年が過ぎた、この間の記録を同人誌に発表する機会を得、後に岩波新書から『ぼくの町に原子力船がきた』（岩波からの出版は東北では二人目）を出版することになる。

八十歳を迎えても、中村先輩が、「原子力問題は二十代の頃から少しも解決していない」と語っていたのが、脳裏に焼き付いているが、介護をしていた頃の手紙には、中村先輩が常食していた「けんちん汁」が記され、そのけんちん汁は、

「……牛蒡（ごぼう）、人参、小魚、他を油で炒め、大鍋で作る」そして「今日も母の霊前にお供えして……」手を合わせていた。